希望の子

小林市立南小学校　　校長通信
令和３年３月１日　　第11号　（文責　校長　吉井秀一）
TEL: (0984) 23-3520　E-mail:1403eb@miyazaki-c.ed.jp

学校HPでも、お伝えしておりましたが、先日、フリーマガジン「ニシモロスタイル」の取材を受け、その記事が情報誌として発行されました。

新企画「ぼくらの校歌」の第一回目として学校の写真と共に紹介されています。

南小学校の校歌は、テンポよく、言葉も比較的易しいので、唱いやすいのが特徴です。長い歴史をもつ伝統校に比べれば新しい学校ですので、「現代風」な校歌と言えるでしょう。

その「校歌」もコロナ禍で唱う機会がめっきり減り、全校で唱ったのは、昨年四月、運動場で行った始業式の時だけでしょうか。そういえば一年生は覚えているかな？

ワクチン接種も始まって、ようやく光も見えてきたところ。みんなの元気な校歌の声が校舎に響くのを心待ちにしています。

あらためて「いじめ」を考える

私が教員になった35年ほど前には「いじめ」は、単独で意味を持つ言葉ではなかったと思います。80年代の学校は、「校内暴力」が社会問題化していました。それらへの対応が厳しくなるにつれて暴力は陰湿化し、生徒が亡くなったり、自ら命を絶ったりする事件が相次いだことから、その原因となった行為を端的に表す言葉が必要になったと思われます。

言葉が使われ始めても混乱は起きました。「これはいじめじゃない。」「いや、いじめだ。」とするズレが新たな問題を生む事態となり、いよいよ「いじめ」の定義付けが必要となりました。当初は、どんな行為が「いじめ」なのかが議論されましたが、当然ながら同じ行為でも受け取り方や感じ方が違います。そこで、被害者の立場に立つことが大前提となりました。

やがて、「身体的・精神的」とか「継続性」などの言葉で意味付けされていき、教師も「相手が嫌だって思ったらいじめになるのよ。」と言い聞かせることとなりました。

しかし、子どもたちは、「相手の気持ち」や「一人ひとり感じ方が違うこと」をまさに今、集団の中で学んでいる最中です。言葉だけの指導では身に付きませんし、未熟なコミュニケーションと不安定な人間関係の中では、いじめにつながるような行為を思わずしてしまうのも当然です。

「悪口を言う」「仲間から外す」「嫌な事を押しつける」：子どもの日常にも残酷な人間関係が垣間見えることがあります。そのような具体的な場面こそ指導の絶好の機会です。空振りはあっても見逃しは厳禁と考えています。

先生方は、日頃から人権の学習や道徳の時間に繰り返し心に訴え、言葉遣いなど日常の指導にも手を緩めません。また、毎月アンケートをもとに全員で協議し、「いじめ」につながる行為に常に警戒の目を向けています。指導後も本当に無くなったと確信できるまで追い続けています。

一方、大人の社会はどうでしょう。人の悪口やうわさは聞こえてはいないでしょうか。テレビでは個人のプライバシーまで容赦なく攻撃して社会から追い出すかのような話題が毎日のように流されています。「正義」なら方法は選ばなくてよいのでしょうか。

社会の行き過ぎた風潮からも子どもたちを守り、言葉の定義や意味付けにこだわるのではなく、人の痛みや心の温かさを感じる体験を通して、いじめをしない強い心を育てていきたいと思います。

ご参観ありがとうございました　参観者の分散を図るために、低学年は朝早くからの授業参観となるなど、大変だったかと思います。御協力のおかげで、最後の参観日を無事に実施することができ、子どもたちも喜んでいました。ありがとうございました。

「学校スナップ」

改築前の校舎の写真を整理しています。

この正面玄関前は
朝になると高学年の子どもが集まり
中庭に、きれいにほうきの目をたてたり
くま手で砂利をならしたり
してくれていましたね。

旧校舎の教室棟です。
校舎の間には大きな飼育小屋があって、
うさぎとカメ？がいたかな？
野菜を持って行くと、
どこからともなく　カメがうようよ集まってきたのを覚えています。

※　スナップに関する御意見や学校の思い出話など、遠慮無く学校までご連絡ください。
学校の毎日の様子や行事予定など、

「南小学校のホームページ」もどうぞご覧ください。